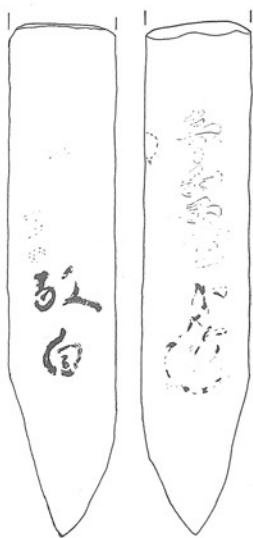


〔台力〕〔宗力〕

(446)  $\times 9 \times 14$  059

なお木簡の釈読にあたっては、伊藤宏之氏等からご協力を得た。



(小 悟)

昨年の研究集会で、馬場基氏が俵中に札を入れる事例として『地方判例録』の記事を紹介された際、狩野久氏はそれが紙製であることを確認された。このような俵中の紙札の事例が、永正元年（一五〇四）三月、和泉国日根野庄で起きた米俵横領未遂事件の記録に見えるので紹介しよう。

菖蒲村の百姓龜源七が大鳴山七宝滝寺の西坊に米一俵を預けて置いた。ところが、正円右馬なるものが西坊に「正円右馬之由、札ヲ付サセテ」、その後、札に任せて持ち去ろうとしたという。そこへ偶然にも、俵を引取りにきた源七が出くわした。右馬は、すでに「札ヲ付置之条」はまぎれない事実だといって持ち帰ろうとしたが、源七は、自分が最初に預け置いた証拠として「龜源七預置主之由、切紙ヲシテ入表（俵）中畢」と反論に出た。そこで俵を開いて米を器に移してみたところ、果たしてその切紙が見つかり真実は明白になった。右馬は、覚え違ひだったといつて米を源七に引き渡し、その場はひとまず収まつたという（『政基公旅引付』同二十八日条）。

どこまで一般化できるのかわからないが、俵納入物の属性記銘手段として、付札の外付けと紙札の納入の両様の方法があったことは読み取ってよいであろう。

(鈴木景二)